



殉は自分の耳を疑った。

加夏子の口から、こんな下品で強烈な言葉が発せられた事が俄かには信じられなかった。

彼の目がもし見えていたなら、現実には更に過酷なものであったろう。

つぶらな瞳は裂けた如く釣り上がり、半開きの口からは牙が生えているかのように歯がゾロリと覗いている。目尻や口許には老婆のような皺が幾本も走り、涎まで垂らしていた。

赤味ひとつ差さない顔の白さだけが、残された彼女の痕跡だった。

耳障りな叫びを喉から噴き上げ、加夏子が殉の襟首を下からわし掴みにした。

「なっ!？」

そのまま引き寄せ、顎に額を思い切り打ちつけた。

もんどりうって吹き飛んだ彼を血走った双眼が見下ろす。

パツクリと切れた額からダラダラと血が流れていた。

仰向けに倒れていた殉がノロノロと身をよじり、落葉だらけになりながら手と膝で躰を起こした。

「…どう…して…?…」

何が起こったか理解出来ぬまま、彼の手はガサガサと落葉の中を掻き回した。

コ・レ・カ・イ・?

いつの間にか殉に手の届く所まで車椅子を動かしていた加夏子が、右手の白く長い棒をヒラヒラと振ってみせた。殉の杖だった。

ビシッ!!

足許に蹲る殉へ向け、頭といわず躰といわず杖を降り下ろす。

狂ったように何度も何度も杖を叩きつける加夏子の目には、異常な光が爛々と灯っていた。

折り畳み用に作られた杖は加夏子の猛打にも折れず、かえって鞭のように殉の躰に食い込み、無数の打撲痕を刻んでゆく。

「やめて、止めるんだカナちゃん! こんな…どうしちゃったんだっ!？」

遂に杖の先端が砕け散った時、殉の右手がガシッと白い凶器を掴んだ。

涎を撒き散らしながら、加夏子はその手に噛みつく。

ブシュ

くぐもった音が聞こえるのと同時に、白眼を剥いた加夏子が車椅子に倒れ込んだ。

「エクソシストの時間は終りだよ、お姫さま」

片手に高圧噴射式の注射器を掲げた医師が、車椅子の背後に立っていた。

「…だれ？」

「大変だったね～堀川クン。だいじょ～ぶ？」

医師は殉に、精神科の九十九だと名乗った。

◇

グツタリと車椅子の背に身を預けた加夏子が運ばれてきた時、恵美子は丁度、病室のベットを整えている所であった。

「カナちゃん?!」

「だぁ～いじょうぶだって、少しヤンチャが過ぎてたんでね、コレでオネンネしてもらっただけだからさ」

九十九は白衣のポケットから拳銃型の注射器を取り出して、フウ～っと息をかける。

「また医局に内緒で持ち出しましたね、鎮静剤は麻薬扱いなんですよ。いい加減ちゃんと申請して頂けませんか？」

怖い目で恵美子が睨む。

「だぁ～ってさぁ～、ウチの病院ってメンドクサイじゃん、そーいう手続きっていうのさ～」

「どこでも同じです」

だらしなくモジモジする九十九の姿はユーモラスを通り越し滑稽ですらあったが、恵美子は堅い表情を崩さなかった。

「とにかく、この娘をベットへ」

面倒くさそうに手伝う九十九の動きを、それとなく恵美子は観察した。

見事だった。

抱え方

恵美子とのタイミングの合わせ方

横たえる際の細心の心配り

なまなかの看護師では及ばぬ程の繊細な動きが、ダラけた所作に隠れていた。

「ホヘエ～、けっこう重いな～お姫サマは～」

相変わらずおどけた顔をして九十九が言う。

このヒト、どういう人なんだ…

じっと睨んで動かない恵美子に気付いた九十九が声を発した。

「どしたのお～エミちゃん、顔がコワイねえ～」

「…注射器の事は伏せておきます」

「そりゃド～モ」

「ここ暫く、先生の機転でカナちゃんの感情の爆発から難を逃れた看護師は何人も居ます。彼女がまるで統合失調症のような症状をみせているのは、私達の間では有名な話です」

「ほう」

九十九が目を細めた。

「だから、先生のなさっている事とやかかく言うつもりはありません。ただ…」

「ただ？」

「貴方の考えている事が判りません。隔離するでもなく、野放しにするでもなく… 一体、この娘をどうしようというのですか？」

普段は冷静な恵美子の声が大きくなった。

九十九が、不意にニヤリと笑う。

こわい…

首筋に鳥肌がたつのを、恵美子は抑えられなかった。

◇

「先生はそうやって、鎮静剤で彼女を抑えるだけ。少なくとも、今までは」

首筋を伝う寒々しさを押し退け恵美子は言った。

「ふん。で？」

「具体的な治療はいつ始められるのでしょうか。先生に意見出来る立場でないのは判っています。しかし此れでは、この娘はまるで晒しものではありませんか？ 勝手気ままに暴走を繰り返し、それ以外の時は冷たく醒めた目で他人を見透かす。この娘は本来、そんな人間ではありません。以前、感情的になって私に食事のトレイをぶつけた時だって、運悪く切れてしまった私の額の傷を見て青くなっていた位ですから」

「治療ならもう始まっているよ」

「えっ？」

「何故、彼女は唐突に狂暴な振る舞いをするようになったと思う？」

「それは… やはりあの晩、この娘を変えてしまうような何かがあって…」

恵美子は言葉を濁した。

問い詰めた筈が、立場が逆転していた。

「棚上げにお手挙げ。僕達の置かれた状況さ。判るかい」

「はあ…」

とっさに言葉が見付からなかった。

九十九の言っている意味がよく判らなかったのだ。

「痛覚検査の結果を聞いたかい？ 足だけでなく腕や躰の一部にも行われているんだが、パスこそしているものの結果は全て最低値を示していたよ」

手近にあったパイプ椅子を引き寄せまたがると、背もたれに両肘を置いた九十九は覗き込むように恵美子と向かい合った。

「これが何を意味するか。どうだい？」

「判りません」

それを聞き、何やら納得したような面持ちで九十九が断言した。

「情緒麻痺だよ。しかも飛びきりいびつな形の、ね」

人間はねえ…と、九十九が続けた。

大きな衝撃や攻撃を受けると、心の働きを自動的に抑え込む事でダメージを避けるのさと、教師のようなもの言いで目の恵美子に言って聞かせた。

本来は情動そのものを抑制しダメージの蓄積を回避するのが情緒麻痺の筈なのに、患者がこれ程の凶暴性を示すというのは、暴れる事自体が患者自身を守っているのに他ならないのだ…と。

「外見では判らない。唯一、判断する方法は痛覚検査だけだ。情緒麻痺に陥った人間は痛みに対し極端に鈍感になる。思い当たるフシがあるんじゃないかい」

恵美子はハッとされた。

そう言えば、あれ程注射を嫌っていた加夏子が、最近は顔色一つ変えずにそれを受けるさまに酷い違和感を覚えた事があった。

「だとしても、それが先生の治療とどう関係あるのですか？」

恵美子も九十九の顔を覗き込んだ。